離島通学が抱える現状と課題

櫻井　凜[*1]・木谷　秀勝

Present Condition and Task of Communing to Isolated Island System

SAKURAI Rin [*1], KIYA Hidekatsu
（Received August 3, 2023）

キーワード：離島通学、山口県防府市、野島小中学校

１．山口県内の離島通学について

１－１　山口県内の離島

日本は周知のとおり島国であり、令和５年２月 28 日に国土地理院が発表した結果では、日本の島の数は 14、125 島である（国土交通省国土地理院，2023）。その中で山口県は 396（うち、1 島が他県に跨る島の数）の島が存在し、全国的に見ると 13 番目に多く、有人離島は表１のように 21 島を数える（山口県，2021）。ここで示す「有人離島」とは、公益財団法人日本離島センター（2016）が出している基本情報で「基本的には、5 年ごとに実施される国勢調査において人口がカウントされる島、または市町村住民基本台帳に人口登録がなされる島」である。

表１　山口県の離島地域と学校状況

地域の名称	地域内の有人離島（令和５年度の学校状況）
柱島群島地域	端島、柱島、黒島（いずれも小中学校は休校）
周防大島諸島地域	情島（小中学校は休校）、浮島（小学校は開校）、前島（廃校）、笠佐島（教育施設はなし）
平郡島地域	平郡島（西浦地区の小学校は休校、東浦地区は令和５年度から再開、中学校は平成６年度から島外に統合）
熊毛群島地域	馬島（教育施設なし）、佐合島（教育施設なし）、祝島（小学校は令和３年度から再開、中学校は休校）、八島（廃校）
周南諸島地域	牛島（閉校）、大津島（小中学校は休校）、野島（小中学校で離島通学制度を実施）
響灘諸島地域	蓋井島（令和５年度に小中一貫教育校を開校）、六連島（小中学校とも本土に通学）
萩諸島地域	見島（平成 27 年度に小中学校を併設）、大島（小中学校は開校）、櫃島（教育施設なし）、相島（小中学校は令和３年度から休校）
７地域	21 島（11 市町）

＊下線のある島は、小学校あるいは中学校が開校されている

山口県が今後 10 年間で計画する離島振興の大きな目標は「安心･安全で活力に満ちた個性豊かな島づくり」であるが、その一方で、「人口減少や高齢化の進行、地域や産業の担い手不足の顕在化など、離島を取り巻く状況が厳しさを増す」現状は大きな課題となっている。

＊１　山口大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専攻学校臨床心理学専修修士課程

１－２　山口県内の離島での教育の現状

県内の 21 島の中で、表 1 のとおり現在開校するのは 7 島（11 校）だけになる。しかも、児童・生徒数の減少に伴い、今後の存続は厳しい状況であり、今後休校あるいは閉校する可能性が高いことも事実である。

こうした現状に対して、山口県としては、「本土と比較し児童生徒の数が少なく、資質・能力や、個性を育てていく可能性」の側面を強調すると同時に、児童生徒数が少ないことによるマイナスな側面に対しては、「1 人 1 台タブレットの効果的な活用やオンライン授業などにより、他の地域の学校との交流の促進」を図ることで補っている。

１－３　離島通学の制度

その中で、防府市立野島小中学校は離島通学を活用している。離島通学は、公益財団法人日本離島センター（2016）によると、「文部科学省の定める学校選択制に含まれる。通常、市町村教育委員会が通学区域を設定するが、一定の基準（特色ある学校運営）を満たした小・中学校については、当該市町村の全域から児童・生徒の募集が認められる」制度であり、実際には平成 10 年度から実施され、平成 28 年度では、9 県 10 市 12 島の小学校 12 校と中学校 7 校がこの制度を活用している。

山口県内では、周南市の「大津島ふれ愛スクール事業」（大津島地区コミュニティ推進協議会，2009）として大津島小学校・中学校で平成 21 年度から始まったが、大津島小学校は平成 28 年 4 月から、大津島中学校は平成 27 年 4 月から、在校生不在による休校となったため、現時点では防府市立野島小中学校だけが離島通学の制度を活用している。

２．防府市立野島小中学校と離島通学制度

そこで、本節では防府市立野島小中学校の離島通学について報告する。

２－１　防府市野島の紹介

防府市野島は、山口県 HP（2023）の情報では、面積 0.73 平方キロメートル、人口 71 人、世帯数 50 世帯、本土からの距離 14.8 キロメートルの有人離島である（人口、世帯数は令和 5 年 4 月 1 日現在住民基本台帳による）。島のほぼ全域が瀬戸内海国立公園の区域に指定されて、野島への移動は防府市三田尻港からフェリーで約 30 分かかる。フェリーは一日 4 往復で、野島小中学校の児童・生徒と教職員は朝 8 時のフェリーに乗って、午後 4 時 30 分のフェリーで野島から戻っている。

重枝によれば、「野島はまたの名は茜島という雅やかな名でよばれている」とあり、この「茜島」の由来として、野島の盆踊りである「えび屋甚句（下関盆踊り」の中に「茜島なる　その名の由来　昔野島は　つつじの花で　海の色まで　真っ赤に染まり」その景色から船人が「茜の島」と呼ぶようになったと記載している（重枝，2010）。このように、野島は古くから航路の要衝や漁業としての歴史があり、同じく重枝によると、野島の人口は大正 6 年（1917 年）には戸数 218 戸、人口 1135 人を数えている。

こうした漁業を中心にして栄えた野島では江戸時代から寺子屋教育が行われ、その後も小学校は開校され続け、野島中学校も昭和 22 年に小学校の校舎を借りる形で開校している。しかしながら、住民の流失が続く中、野島の児童・生徒数は減少し続け、昭和 59 年に「島の将来を考える会」が開催され、その後平成元年から野島小中学校と改称している（その時の児童数 13 名、生徒数 5 名）。そして、平成 13 年度（2001 年度）4 月から、「茜島シーサイドスクール事業」が開始され、離島通学が始まった。

２－２「茜島シーサイドスクール事業」の概要

「茜島シーサイドスクール事業」（以下、本事業）は、平成 18 年 1 月 1 日制定の実施要綱で、防府市小・中学校通学区域に住所を有し居住する児童（小学校 3 年生以上）と生徒（全学年）を対象として、小・中学校合わせて定員 10 名程度とする。就学期間は原則 1 年以上の通年通学（継続を希望する場合は、必要な手続きを行なう）とし、通学方法は渡船通学（防府市からの通学費補助金制度を活用）、登下校では安全確保のため自宅と三田尻港桟橋までの送迎は保護者の責任で行うことが就学の条件として明記されている。なお、通学に必要な手続きは「茜島シーサイドスクール事業実施要綱」（山口県，2023）を参照願いたい。

防府市教育委員会の意向として、本事業を「野島の豊かな自然環境を活かし、心温まる教育風土の中で、知・

徳･体のバランスのとれた児童･生徒を育むために小規模特認校制度」（見好，2016）として、開始している。同時に、野島側の意向としては、「島の行事や伝統文化の継承」に子ども達や学校の教職員の参画が欠かせないだけでなく、「子どもたちの明るい笑顔と屈託のない言動は、多くの地域住民に元気と潤いをもたらしている」。このように「島に学校があることは､住民と子どもたち双方にとって利の大きい関係」であり､「この島だからこそ学ぶことができる人の心の温かさや、島の大自然の中で培うことができる逞しさを、ぜひ身につけて」､「ふるさととそこに暮らす人々を愛する心をいつまでも忘れないでほしい」と本事業を支援する会の当時の会長が述べている（見好，2016）。このように、双方の次世代育成への意識が合致する形で本事業は開始された。

２－３　野島小中学校の児童生徒数の推移

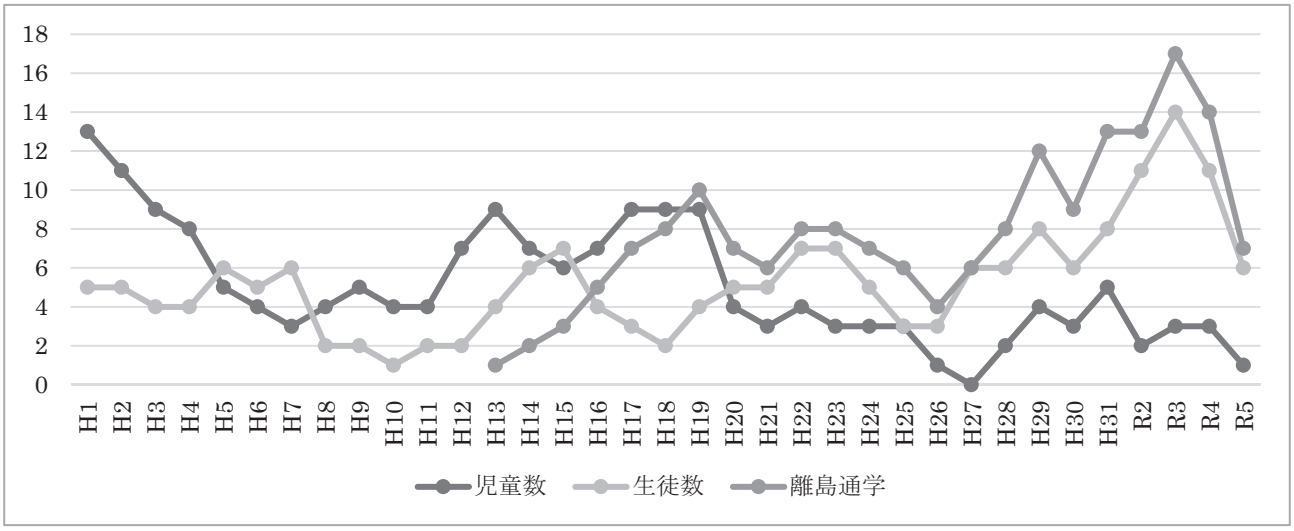

図１　野島小・中学校の児童生徒数の推移（平成 13 年度から事業開始）

見好（2016）によれば、平成 13 年度に渡船通学生 3 名が転入し、その後、平成 25 年度からは、島出身の児童・生徒の在籍がなくなり、渡船通学生のみになっている。図 1 は、令和 5 年度当初に校長からの提供資料を元に筆者らが作成した、平成元年からの児童・生徒数、さらに平成 13 年度からの離島通学の児童・生徒数の現在（令和 5 年度）までの推移を示す。

その推移からわかるように、平成 16 年度以降 5 ～ 10 名の範囲内で推移していた離島通学の児童・生徒数は、平成 27 年度以降上昇しているが、令和 4 年度から減少している。

この 3 年あまりの新型コロナウィルス感染の影響がどの程度離島通学に関係しているかは不明であるが、高齢者の多い野島の感染予防対策として、離島通学の児童・生徒だけでなく、教職員の健康状態が厳しく管理されている状況であることは確かである。

３．今回の調査研究の中間報告

３－１　目的

３－１－１　現在の子ども達が抱える心身の健康の問題点

新型コロナウィルス感染症の分類が令和 5 年 5 月 8 日、季節性インフルエンザなどと同じ「5 類」に引き下げられた。それに伴い、マスクの着用が個人の判断に委ねられるようになり、行動制限が求められなくなるなど、次第に人々は元の生活を取り戻しつつある。本報告では、5 類に移行される前の令和 4 年度（令和 4 年 7 月～ 3 月）に行った調査研究について報告する。

コロナ禍が続いていた令和 4 年度は、感染のリスクだけでなく、生活体験自体が制限される事態が続き、家庭や学校において子ども達の心身の健康の維持促進を図ることに大きな課題が生じていた。特に、こうした予想外のストレスを受けている子ども達が自らの力でストレス自体を軽減することは年齢的に困難であり、そのために家庭・学校・地域などからの支援が重要になる。

ところが、こうした外的環境（家庭・学校・地域など）からの支援だけでは、様々なストレスの対処方法（コーピングスキル）を維持できても、子ども達が主体的に心身の健康の促進を図ることは難しい。

そこで重要になる視点が「レジリエンス」の概念である。レジリエンスは、「精神的・心理的回復力や、立ち直る力、復元力、復活力」と定義されるように、近年では、外傷的体験を克服する、あるいは抑うつ状態からの回復など、人間個々が潜在的に有する「心理的回復力」と指摘できる（藤野・日戸, 2015）。したがって、子ども達の心身の健康は、「外的環境からの支援」と「個々が持つ心理的回復力」の両側面が有機的に機能することで、維持、さらに促進されると推測できる。

３－１－２　調査動機

本事業（第２節参照）は、豊かな自然環境、心温まる教育風土に恵まれた野島小中学校に通学し、児童・生徒の心身の成長を図り、心豊かに生きる力を培うことを目的とした事業であり、野島小中学校では少人数で教育活動が行われており、自然豊かな環境下で通常の学校では見られない様々な学校行事（漁業体験、シーカヤック、盆口説きなど）が実施されている。

したがって、野島小中学校に通う児童・生徒は本事業を通して、「外的環境からの支援」（家庭の協力、学校でのより個別指導の充実など）と「個々が持つ心理的回復力」（主体的な登校から生まれる生活リズムの安定、自然体験への積極的参加など）の両側面が有機的に機能できる環境であると指摘できる。

３－１－３　調査の目的

そこで本調査では、以下の調査方法を通して、野島小中学校の生活を通して児童・生徒の心身の健康がどのように変化するか明らかにすると同時に、「外的環境からの支援」と「個々が持つ心理的回復力」の有機的な機能の重要性について検討することを目的とする。

３－２　令和４年度の調査方法

以上の目的を明確にするために、今回の調査は以下のとおりの方法で進めた。同時に、江山稔防府市教育長に調査研究の目的などを口頭で説明し、調査方法などについて了解いただいた。

３－２－１　学校訪問日程・内容

令和４年度は、表２のとおり、計８回野島小中学校に訪問した。なお、令和５年度も引き続き櫻井が月１回ほど、木谷が学期に１回程度訪問し、調査研究を行う予定である。

表２　2022 年度の訪問日程・内容

7/6　（水）半日　田中・櫻井	授業観察、研究についての打ち合わせ
9/13（火）半日　木谷・櫻井	授業観察
10/27（木）全日　櫻井	授業観察、芋ほり
11/24（木）全日　櫻井	授業観察、地域の方への新聞配布
12/19（月）半日　木谷・櫻井	授業観察、学習に関する助言（ノートの取り方から）
1/19（木）半日　木谷・櫻井	質問紙のフィードバック
2/20（月）半日　木谷・櫻井	心理検査実施、授業観察
3/22（水）半日　木谷・櫻井	質問紙のフィードバック、面談

３－２－２　調査方法

今回の調査では、児童・生徒及び教職員の時間的負担だけでなく、心理的負担を最小限とするために、調査内容については、次の方針であることを山崎隆英校長に伝え、教職員全体からの了解を得た。

① 調査内容は、原則として従来から実施されている児童・生徒の調査内容・結果を活用すること（体力測定の結果、登校状況、テスト・定期考査の結果、通常の授業で使用しているノートなど）。

② その際に、児童・生徒の個人情報の保護には最大限努めること（詳細は後述する）。

③ 調査研究で得た資料や情報については、児童・生徒だけでなく、教職員とも共有できるように配慮し、

通常の教育活動・生徒指導に還元できるようにすること。

３－２－３　質問紙調査の実施

本調査の目的を達成し、上記の資料・結果を客観的な視点から補足、あるいは可視化する目的として、木村（1991）が作成した「子どもの健康度尺度」を定期的に実施することとした。

「子どもの健康度尺度」は、小学生から中学生を対象とし、健康を「身体的健康」（12 項目）、「精神的健康」（12 項目）、「社会的健康」（12 項目）、以上の 3 つの側面の計 36 項目で実施する調査用紙である。それぞれの項目は、小学校低学年でも回答できるように、「いいえ」・「ときどき」・「はい」の 3 件法である。

調査は通常の授業中に行い、学級担任に教示から調査用紙配布、回収を依頼し、１回目の調査は、全員（11 名実施）を対象に 12 月下旬に、2 回目は、卒業する児童･生徒（小学 6 年生、中学 3 年生で実施したが、同時に 1 回目の時に欠席した児童 1 名、計 7 名実施）を対象に 2 月中旬実施した。

なお、令和 5 年度は 5 月下旬～ 6 月上旬に 1 回目の調査を、2 回目は 2 学期中に実施予定である。

３－２－４　倫理的配慮

倫理的配慮に関しては、事前に防府市教育長と野島小中学校長及び教職員に口頭と文書（表 3）で説明し、快諾を受けている。

表３　倫理的配慮

＊個人資料については、活用する項目を事前に保護者・学校長に文面において許可していただき、情報の転記に当たっては、教員の立ち合いの元で作業する。
＊児童生徒の氏名はすべて匿名化を行い、情報管理には暗号化可能な USB を使用して、指導教員が管理することとする。
＊最終的に、論文が完成した後は、学校に赴き、教員立ち合いの元で、情報の削除を行なう。
＊もしも家庭・学校が懸念される場合には、調査途中でも研究への協力を取り下げることも可能であること、取り下げによって、対象となる児童・生徒に何らかの不利益が生じることはけっしてないことも文面で明記する。
＊今回の調査研究の結果を整理した論文（修士論文）については、学校長に内容等の確認を依頼して、精査したうえで、最終版とする。
＊論文自体は、調査者が所属する「学校臨床心理学専攻学校臨床心理学専修」関係者だけが参加する口頭発表会で、調査対象者が特定されないように配慮した上で、報告する。同時に、修士論文の概要は専修内部のみ閲覧可能として、外部への公表は不可とする。
＊倫理的配慮に係る責任者は、指導教員である木谷秀勝（教育学研究科教授）として、連絡が可能な電話番号等を記載する。

３－３　調査結果

令和 4 年度の約半年間の調査研究の結果として、「子どもの健康度尺度」の結果と児童・生徒の個別の指導計画を作成した。なお、本報告では、個人情報保護のため、「子どもの健康度尺度」の結果のみ報告する。

３－３－１　「子どもの健康度尺度」の結果

令和 4 年 12 月に実施した「子どもの健康度尺度」の結果（灰色）を木村（1991）の調査結果（黒色）と比較して示す（図 2）。なお、今回の報告では、児童・生徒 11 名の結果の平均値のみを報告するが、学年別の場合、1 名のみの学年もあり、個人情報の保護の観点からも今回は報告しないこととする。

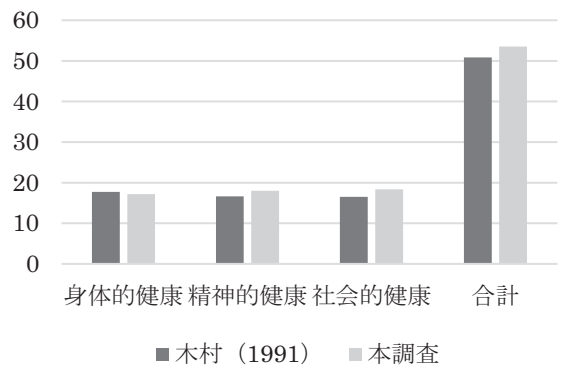

図２　全体の平均値

全体の結果（図 2）では、統計処理は行っていないが、木村の結果と比較して、「身体的健康」のみが低い結果となった。次に、3 つの側面を木村の調査結果と比較する。なお、木村の調査対象は、小 2・4・6 と中 2 である一方、本調査では小 4 ～中 3 となっているため、一部のデータは正確に比較できないが、年齢による変化と合わせて検討した結果、「身体的健康」では、小学生全体が木村の結果よりも低く、逆に中学校では高くなっている。「精神的健康」でも、「身体的健康」と同様な結果となる。「社会的健康」では、小 5 のみが木村の結果よりも低く、他の学年は高い結果となる。

３－３－２　「子どもの健康度尺度」に見られた変化

先に示したように、小学校と中学校を卒業する児童・生徒を対象に、2 回目の調査を実施した。調査時期として、中学 3 年生が私立高校の受験が終わり、一段落した時点で実施した。その結果、小 6（1 名）では大きな変化は見られなかった（詳細は個人情報の保護のため略す）。

中 3（5 名）の平均値では、「精神的健康」が 1 回目より 0.8 高くなったが、全体的な変化は見られなかった（図 3）。そこで、5 名それぞれの結果を見ると、1 名が大きく低下（合計で－ 8）し、2 名がほぼ同じ、そして 2 名が大きく伸びている（ともに合計で＋ 6）。

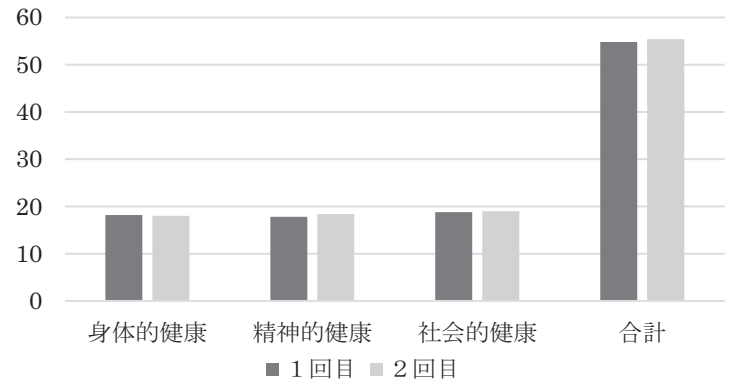

図３　１回目・２回目の比較（中３）

３－４　考察

昨年 12 月に実施した「子どもの健康度尺度」の結果と木村（1991）の調査結果を比較すると、木村の結果に比べ「身体的健康」のみが低く、「精神的健康」及び「社会的健康」は高い結果となった。3 つの側面を合わせた合計点では、特に、中学生では木村の結果よりも高い結果となった。「身体的健康」の低さは、野島小中学校に通う児童・生徒は、部活動をしておらず、車で保護者に港まで送迎してもらっていることから、身体を動かす機会が少ないことが考えられる。中学生の高い結果は、3 年生が多く、後述するように、心身ともに安定した成長段階であることや、家庭の協力や学校・地域が一貫性をもちながら継続的に生徒個々に応じた個別対応を進めたことによる教育的効果と推測できる。

野島小中学校は、豊かな自然環境、心温まる教育風土に恵まれており、学校訪問時には、季節の変化を肌身で実感している児童・生徒の様子が数多くみられた。島内を歩いている時にホオズキや柿を発見して教員と共有したり、校庭に自分たちで植えた花を気にかけたりしていた。また、島に住み着いた猫に名前を付けて、数人が集まり猫をなでていた。自然と触れ合う機会が常にあり、時がゆっくりと流れているようであった。4 度目の訪問時には、島の住民へ学校新聞を配る活動があった。島の住民は児童・生徒が自宅を訪ねてくることに対し、慣れた様子で温かく接していた。児童・生徒も住民の名前を覚えていたり、身体を気遣ったりと本土から通ってきているにも関わらず、島の雰囲気に馴染んでいる様子であった。また、毎日利用する船の船員との交流もみられた。こうした関わりを通して、学校教育への理解が生まれ、島全体で児童・生徒を見守っているような安心感や居心地の良さが得られるのではないかと考えられる。

野島小中学校では少人数での教育活動が行われており、自然豊かな環境下で通常の学校では見られない様々な学校行事が実施されている。少人数での授業は一人ひとりのペースに合わせやすく、個性を尊重しやすい。そのため、誤字脱字がなく、児童・生徒一人ひとりのペースで活動できていた。教員に合わせた達成感ではなく、児童・生徒本人に合わせた達成感を感じられていた。また、毎日保護者が児童・生徒を港まで送迎するため、保護者と教員が顔を合わせる機会が多く児童・生徒の家庭での様子を聞くことができる。そして、児童・生徒からは、「他の学校にはない行事があるのがこの学校のいいところだ」という発言があった。新聞配りについても楽しいと話していた。

以上のことから、離島通学を活用する野島小中学校の教育環境下では「外的環境からの支援」（家庭の協力、学校でのより個別指導の充実など）と「個々が持つ心理的回復力」（主体的な登校から生まれる生活リ

ズムの安定、自然体験への積極的参加など）が有機的に機能している結果として、児童・生徒の「精神的健康」及び「社会的健康」にポジティブな影響を及ぼしていると指摘できる。

４．離島通学が抱える現状と課題

令和４年度は、通学のための乗船時に検温が行われた。その目的は高齢化が急速に進む野島の住民の方々の健康維持のため、新型コロナウィルス感染を徹底予防するためであった。それだけ急速に進んでいる野島の高齢化の問題は、児童・生徒を支えてくれる野島の温かさ自体が減少するだけでなく、離島通学への理解者も減少する事態を招いている。

本事業は、表１に示したように令和４年度以降は希望者が大きく減少している。こうした児童・生徒の大幅な減少は、同時に教職員の減少にもつながり、結果的に教育効果自体が低下する悪循環にもつながる。「令和４年度へき地・複式教育　実践研究紀要」で（令和４年度）山口県へき地教育振興会会長伊藤和貴が報告しているように、「へき地・複式校では少人数の特性をプラスに生かしながら、個に応じたきめ細かな指導」を実践することで、「学びの主人公になって達成感を味わい、自己肯定感と自己有用感を高める活動」を進めている。そのためにも、学校だけでなく、保護者や地域との連携・協働が重要になってくる。その点からも、野島が抱える現状を踏まえながら、今後の本事業の継続をどのように進めるかを検討するが重要な課題となる。

しかしながら、もっと重要なことは、こうした現状の中で児童・生徒が伸び伸びと登校する姿が毎日のように見られ、調査結果（今回は掲載することができない個別の情報を含めて）からわかるように、一定の教育効果が見られることは事実である。そこで、令和４年度から５年度にかけても、継続的な授業観察のための学校訪問を月に１回程度行うだけでなく、先の調査方法で示した調査データを個別に分析することで、児童・生徒一人ひとりの支援の進め方を教員に還元することを予定している。同時に、２年間の調査研究の結果とその活用に関する教職員のアンケート調査も実施して、野島小中学校だけでなく、広く山口県独自の「へき地・複式校」の教育に活用できることを検討する予定である。

付記

今回の報告に際して、調査研究の主旨をご理解いただき、ご協力を賜りました江山稔防府市教育長に深く感謝申し上げます。同時に、調査研究の実施に当たり、ご協力賜りました前野島小中学校校長山崎隆英先生、現野島小中学校校長野﨑誠先生を初め、野島小中学校の教職員の方々、さらに本調査研究をコーディネートしていただきました久木田由紀子養護教諭（令和４年度野島小中学校、令和５年度から山口市立生雲小学校）に厚く感謝申し上げます。

文献

藤野博・日戸由刈（2015）：発達障害の子の立ち直り力ー「レジリエンス」を育てる本，講談社.
防府市教育委員会（2006）：茜島シーサイドスクール事業実施要綱.
https://www.city.hofu.yamaguchi.jp/uploaded/attachment/113758.pdf（最終閲覧、令和５年７月 27 日）
木村（1991）：子どもの健康度尺度の作成とその信頼性・安定性および妥当性の検討，日本看護科学会誌，11（2），24-34.
国土交通省国土地理院（2023）：日本の島の数.
https://www.gsi.go.jp/kihonjohochousa/islands_index.html#:~:text=（最終閲覧、令和５年７月 27 日）
公益財団法人日本離島センター（2016）：「島」とは何か.
https://www.nijinet.or.jp/info/faq/tabid/65/Default.aspx（最終閲覧、令和５年７月 27 日）
見好敏和（2016）：離島通学③野島（山口県防府市）－野島小・中学校　地域の学校を目指す「茜島シーサイドスクール」事業，しま，247 号，82-86.
大津島地区コミュニティ推進協議会（2009）：『大津島ふれ愛スクール事業』が始まります，潮流，191 号.
重枝慎三（2010）：防府市野島の歴史と暮らし，山口県立図書館所蔵（非売品）.

山口県（2021）：山口県離島振興計画（案）（計画期間　令和５年度～令和 14 年度）
https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/ 155014.pdf（最終閲覧、令和５年７月 27 日）
山口県（2023）：離島・野島.
https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/30/14134.html（最終閲覧、令和５年７月 27 日）